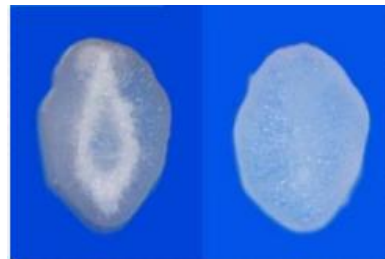


農業分野 水稻

出穂期以降、登熟期に高温が続くと、白未熟粒などの登熟障害が発生しやすくなります。

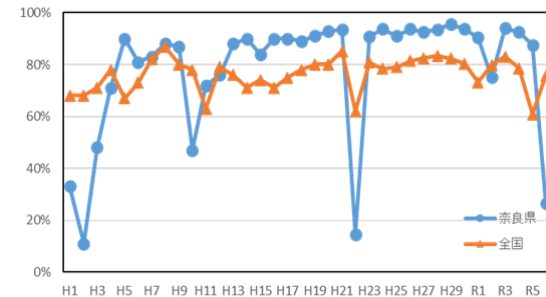
高温登熟障害等の影響により本県の令和6年産一等米比率は大きく低下しました。
(一等米比率：令和6年度26.5%、令和5年度87.5%)

白未熟粒（左）と正常粒（右）の断面



出典：平成27年地球温暖化影響調査レポート
(農林水産省)

水稻うるち玄米一等米比率の推移

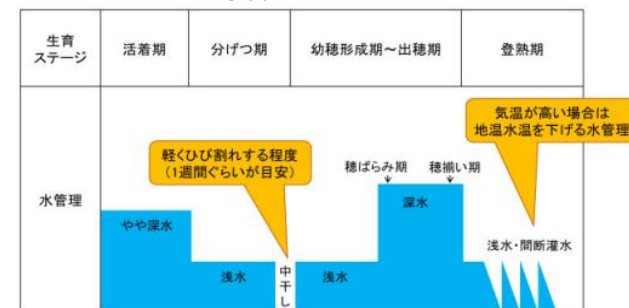


出典：米穀の農産物検査結果等（農林水産省）

< 高温障害回避技術の検討 >

奈良県では、県奨励品種「ヒノヒカリ」の高温登熟障害回避技術（遅植え、早期中干し、後期多肥など）を検討するとともに、水稻の高温障害対策に関するチラシを作成し関係者に周知しています。

水管理のイメージ



出典：水稻の高温障害対策について（奈良県 農業水産振興課）

< 高温耐性品種の検討 >

令和7年には、JAならけん、県米麦改良協会、生産者と協力して、高温登熟障害耐性の水稻4品種の試験栽培を開始しました。

試験栽培は今後3年間実施予定で、奈良県農業研究開発センターが調査を行います。出穂期には生育状況や病虫害被害を確認して、既存品種との比較・検証を進めます。

高温登熟障害耐性品種の試験栽培の状況 （左）移植風景 （右）成熟期



画像提供：奈良県農業研究開発センター



画像提供：奈良県農業研究開発センター

農業分野 花き

2022（R4）年の農業産出額を部門別にみると、花は36億円となっており、奈良県の総産出額（390億円）の約9.2%を占めています。なかでもキクは全国有数の産地となっており、特に小ギクは夏秋期全国1位の生産量を誇っています。県内では、温暖化の影響により、開花時期の変化（前進や遅延）による高需要期の出荷量減少が問題となっています。

<小ギク>

奈良県では近年、春～夏の温暖化傾向による小ギクの開花時期の変動が顕著にみられ、高需要期（盆）の出荷量減少が問題となっています。奈良県農業研究開発センターでは、気象変動に左右されない安定した開花特性を持つ小ギク品種の育成を行っています。



8月咲き「春日の紅」

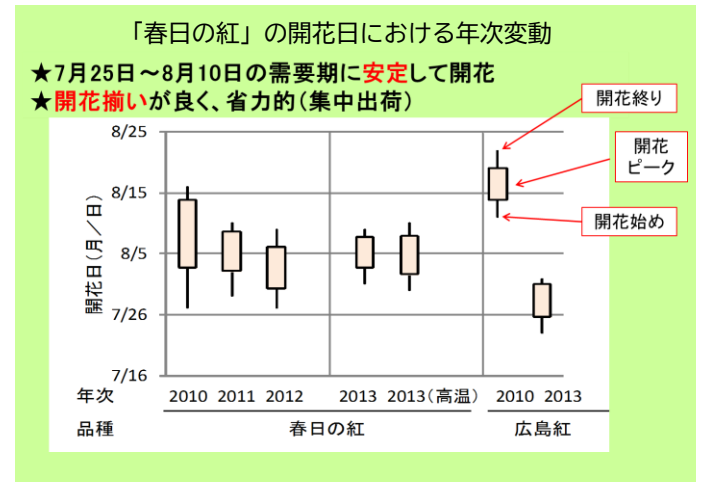


7月咲き「春日の鈴音」



8月咲き「春日Y2」
【流通名：春日の星】

画像提供：奈良県農業研究開発センター



出典：奈良県農業研究開発センター育成のキク品種（奈良県農業研究開発センター）

<シクラメン>

高温による生育停滞や開花遅延により年内に出荷できないことが問題となっているシクラメン生産においては、高温をできるだけ回避する対策が必要です。

奈良県農業研究開発センターではこれまで、夜間冷房による高温対策を検討してきましたが、スポットエアコンを用いた局所冷却による対策の検討も進めています。

日中の効率的な冷却が可能となれば、光合成促進による生育や開花の促進が期待できます。

（左）局所冷却を施していない鉢

（右）局所冷却を施した鉢
夏季の生育が改善され
開花が早まる



画像提供：奈良県農業研究開発センター

イチゴの促成栽培では、秋季の気温が高いことにより開花が遅れ、単価の高い12～1月の出荷量が減少します。奈良県では、高温による開花遅延対策を研究しています。

<育苗期の対策>

固化培地の利用により気化潜熱が発生することで培地温度が低下し、頂花房の開花日が、慣行のポリポットによる育苗に比べて3日早くなりました。



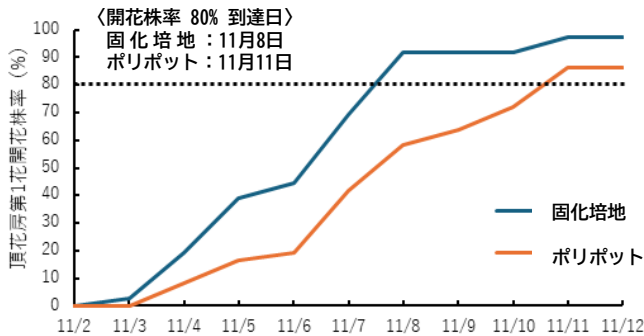
固化培地で育苗中のイチゴ
(商品名「イチゴエクセル
キューブ」みのる産業(株))

育苗方式の違いが培地温度に及ぼす影響

試験区	培地温度 (°C) ²		
	日平均	日最高	日最低
固化培地	27.2	33.5	23.5
ポリポット	28.3	35.3	24.0

²測定期間：2024年8月6日～9月24日

育苗方式の違いが頂花房第1花の開花に及ぼす影響 (2024)



<本ぽでの対策>

秋期の高温により、イチゴの第一次腋花房の花芽分化が遅れるケースが散見されることから、ハウスへの遮熱資材の被覆が培地温度や花芽分化に及ぼす影響について検討しました。

遮熱資材の被覆により、培地温度は低下します。また、被覆期間が1週間に比べて5週間では第一次腋花房の開花日も有意に早くなりました。

この結果は、農業研究開発センターニュース (vol.168(2025年6月)) ※にも掲載されています。

遮熱資材の被覆が培地温度に及ぼす影響

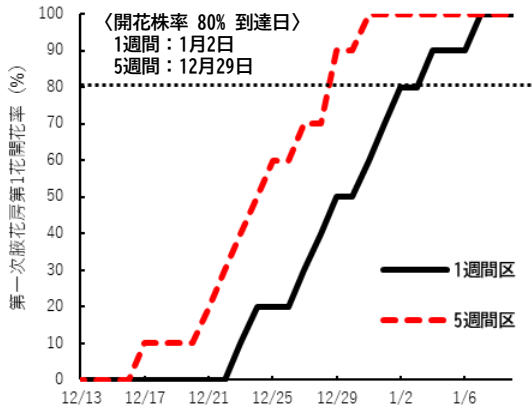
被覆の有無	日最高培地温度 (°C) ²
被覆	27.2
無被覆	30.0

²測定期間：2024年10月10日～10月16日



遮熱資材を被覆したハウス
(商品名「青天張Bタイプ」
(株) 能任七)

遮熱資材の被覆期間が第一次腋花房
第1花の開花に及ぼす影響 (2024)



※ 農業研究開発センターニュース (vol.168(2025年6月))
https://www.pref.nara.jp/secure/324953/vol.168_p2.pdf

農業分野 果樹

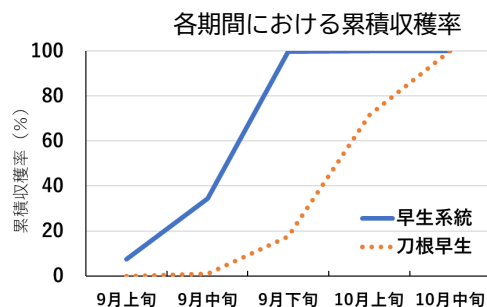
果樹栽培では、夏から秋にかけての高温による果実の日焼けや着色不良の発生や、暖冬による発芽や開花の時期が早まることなどが問題になっています。

奈良県では、主要果樹であるカキやウメを中心に、これらの課題に取り組んでいます。

<カキ>

奈良県の柿の主力品種「刀根早生」は、夏から秋にかけての高温の影響による果実の着色不良による収穫時期の遅延や、果実軟化等の品質低下が問題になっています。

奈良県農業研究開発センターでは、県内生産者が発見した「刀根早生の中でも安定して早く色づく優良早生系統」の特性を調査することで、生産現場での優良早生系統の導入促進を支援しています。



早生系統では、9月末時点ではほぼすべての果実を収穫することができた。

出典：奈良県農業研究開発センターのデータを基に奈良県作成

<ウメ>

奈良県の梅の主力品種「白加賀」は、他品種による受粉が必要ですが、暖冬の年には他品種との開花時期が合わず、受粉不良による収量減少の恐れがあります。

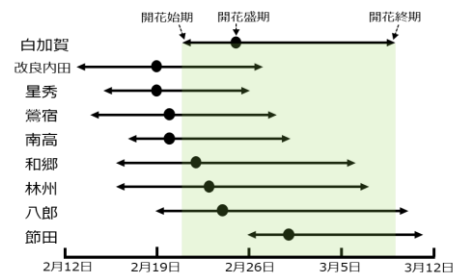
そこで、奈良県農業研究開発センターでは、様々な梅品種の開花時期や花粉の発芽率を調査し、「白加賀」の新たな受粉用品種を検索しています。

ウメ・切り枝試験



画像提供：
奈良県農業研究開発センター

ウメの開花時期の品種間比較



出典：ウメ「白加賀」の安定生産に向けた受粉用品種の検討（奈良県農業研究開発センター）

<温暖化に適応した果樹新規品目の検討>

従来は奈良県に適さないとされてきた果樹品目が、温暖化によって栽培できるようになる可能性も考えられます。

奈良県農業研究開発センターでは、ライチやアボカド等の熱帯果樹や、中晩柑類など新規品目の栽培試験を実施し、越冬の可否や収量などについて調査しています。

アボカドの栽培適正調査



出典：果樹の育種・栽培流通技術に関する研究（奈良県農業研究開発センター）

中晩柑・ポット栽培試験



画像提供：
奈良県農業研究開発センター

農業分野 病虫害等

気候変動の影響により、県内では、南方系害虫の発生増加や、病虫害の発生時期が変化する事例が見られます。
ミナミアオカメムシは平成29年に県内で初めて確認されて以降、既存のアオクサカメムシとの置き換わりが進んでおり、被害増加が懸念されます。
また、南米原産の外来種であるスクミリンゴガイは、暖冬によって越冬個体数が増加しますので、冬の気温上昇とともに翌春の被害発生リスクが上昇していると考えられます。

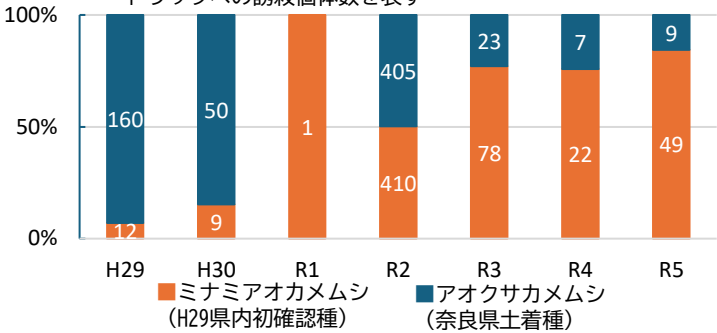
(左) ミナミアオカメムシ※
(右) アオクサカメムシ



※西南暖地（九州南部など）から分布を北上、イネを好んで加害する害虫

画像提供：奈良県農業研究開発センター

近縁カメムシ2種における誘殺量比率の年次推移
奈良県農業研究開発センター（桜井市）内に設置したトラップへの誘殺個体数を表す



出典：奈良県農業研究開発センター

(左) スクミリンゴガイ※の成貝
(右) イネに産み付けられた卵



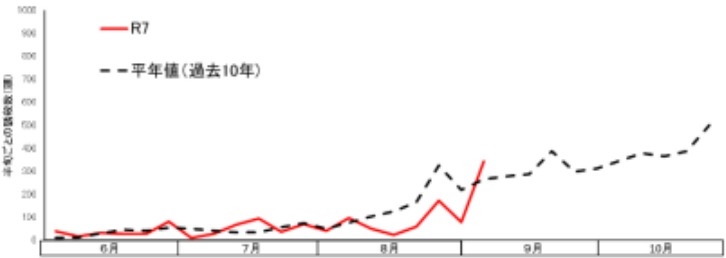
※水田の稲苗を食害する淡水性の巻貝
12～2月の3ヶ月平均気温が5℃を超えると、翌春に被害発生

画像提供：奈良県農業研究開発センター

<奈良県病虫害防除所>

奈良県病虫害防除所では、県内の農作物における病虫害の発生予察や情報提供、病虫害の診断、防除の指導などを行っています。

ハスモンヨトウの誘殺数の推移（奈良県桜井市）



県内にトラップを設置し、害虫の誘殺数が多い場合には農家へ向けて注意喚起を行っている。

出典：令和7年度病害虫情報 第5号（奈良県病虫害防除所）

注意が必要な病虫害に関する情報提供

令和7年9月1日
奈良県病虫害防除所長

令和7年度病害虫発生予報 第5号（9月予報）の送付について

今月の発生に注意を要する病虫害

作物名	病虫害名	発生時期	発生量
水稲	紋枯病	平年並	やや多い
	斑点米カメムシ類	平年並	多い
チャ	チャノキイロアザミウマ	平年並	やや多い
	ネギアザミウマ	平年並	やや多い
ネギ	ハスモンヨトウ	平年並	やや多い
	オオタバコガ	平年並	多い
野菜類 花き類共通	(イチゴ、キク) アブラムシ類	平年並	やや多い
	(キク) ハダニ類	平年並	やや多い
	(トマト、イチゴ) コナジラミ類	平年並	多い
	シロイチモジヨトウ	平年並	やや多い

○気象予報（近畿地方の1ヶ月予報：8/23～9/22）
気温：平年より高い確率80% 降水量：平年より少ない確率50% 日照時間：平年より多い確率60%

○今月の農薬適正使用のポイント
①アブラナ科野菜を間引き菜で収穫する場合は、農薬製剤ラベルに記載された使用上の注意事項をよく読み、間引き菜で畑田で育てる必要な畑田1キリ以上

出典：令和7年度病害虫発生予報（奈良県病虫害防除所）